

「じ」から開く漢詩の扉」

小川智寛 旭川校教員養成課程国語教育専攻1年

日本は古代から多様な面で中国に大きな影響を受けてきた。米を作り始めた弥生時代以降、古代の日本社会は様々なことにおいて中国を規範とし、自分たちの文明を作り上げていった。その中の一つに漢字がある。漢字という中国語を表記するための文字を取り入れ、言語的性質が全く異なる日本語を書き表すためには、中国人と同じ教養を身に付けた上で、独自の工夫をしていかななくてはならなかった。

本書は、日本最古の漢詩集『懐風藻』をはじめとし、空海の『経国集』や、菅原道真の『菅家後集』などを具体例として日本人による漢詩を紹介している。

また、そうした漢詩に関する時代背景、人物や詩の技法に関わる平仄など、多岐にわたる観点から日本人による漢詩の歴史の変遷を紹介している。

本書の構成は、「序章」からはじまり、「万葉歌人たちの漢詩」、「長屋王サロンの詩人たち」、「嵯峨天皇」、「有智子内親王」、「平安期初期の詩人群」、「空海」、「島田忠臣」、「菅原道真」までの全九章と、「あとがき」からなる。「万葉歌人たちの漢詩」には、古代の日本人が苦心しながらも、漢詩を取り入れた当時の状況を、『万葉集』と『懐風藻』を比較しながら述べている。「長屋王サロンの詩人たち」では、天皇や政治的な権力者たちが宴席において作成した漢詩を紹介している。ここでは、漢詩が知的な遊びとして流行し、力のある者たちによって工夫されてきたことが説明されている。「嵯峨天皇」では、自ら率先して漢詩という文芸を日本に広げようと努めた嵯峨天皇の存在の大きさについて紹介し、「有智子内親王」では、希有な女性詩人の一人である有智子内親王の漢詩を、現在でも行われている京都の葵祭と関連させつつ紹介している。「平安朝初期の時代」では、平安期の日本人が、韻律を理解してきたことが示されている。「空海」では、弘法大師という諡を持つことで有名な空海の特徴的な漢詩の傾向を、具体的に詩を例示しながら紹介している。「島田忠臣」では、漢詩を宴席での遊びとしてではなく、個人の感情を表すための道具として使うとい

う、新しい日本の漢詩の形を紹介している。終章の「菅原道真」では古体、今体詩を共に使いこなして独自の詩世界を作り上げた菅原道真の漢詩を鑑賞しながら、彼の教養の高さを説明している。以上にまとめた第一章から第八章までの各章は、時代順に並べられているため、読み進めていくごとに古代の日本人たちが韻律を理解してきたことがわかると同時に、彼らの作った漢詩が中国人に勝るとも劣らぬ水準に達してきていることがわかるように構成されている。

本書の構成上の特徴は、漢詩にあまり触れたことが無い人でも比較的簡単に読めるような配慮が随所に見られる点である。序章での漢詩の規則について簡単な説明を述べている点はもちろんだが、本書では詩ごとに平仄が示され、韻律を守られているかどうかを実際に目で確認できる点も、その配慮の一つである。加えて、中国の逸話や表現を踏まえた言葉についてわかりやすく説明を加えたり、各詩の見どころや魅力もその都度示してくれるため、ポイントを押さえて読むことができる。現代語訳では、漢字ばかりで硬いイメージの強い漢詩を、柔らかく感じられる和語を用い、読者に親しみを感じさせるような工夫がなされている。

本書では構成だけでなく、内容的にも工夫がなされている。例えば、各章の冒頭では唐突に漢詩を引用するのではなく、「七夕」等の現在に残る年中行事を挙げ、読者に馴染みのある話題を提示することで読解の導入としている。また、行事を挙げることで、中国と日本の深い関係を示し、漢詩がより馴染みやすくなるような工夫をしていることに気がつく。ここでは『懐風藻』中の山田三方の「七夕」を通して、筆者独自の視点を紹介しよう。なお、山田三方は、長屋王と同じ時代に生きた詩人である。

筆者によると、六朝時代の詩で七夕の故事を詠うものの多くが、古くから織女が牽牛を訪ねて旅をする状況を描いているのだが、山田の詩は日本に古くから存在していた妻訪（つまがよ）い婚の風習を踏まえたものらしい。つまり、中国伝来の詩で使われた状況設定をそのまま使い、我が国の風習に依拠した発想がなされているのである。このようなことから、古代の日本人達が、独自の文化を漢詩に取り入れていたことが見て取れるだろう。筆者のこうした指摘があつて初めて、日本人の中国文化の受容の一端を具体的に理解することができ

る。

本書を読むことで、漢詩の純粹な面白さ、漢字だけで表現される美しさを理解できる。また、古代の日本人たちが長い時間をかけて少しずつ日本語に漢字を複合させていった苦勞の跡を理解し、漢詩と和歌の奥深いつながりが実感できるとなるだろう。